

—出エジプト 32章・7-11、13-14、1ティモテ1章・12-17、ルカ 15章・1-10—

(そのとき)徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。そこで、イエスは次のたとえを話された。「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。言うておくと、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」「あるいは、ドラクメ銀貨を十枚持っている女がいて、その一枚を無くしたとすれば、ともし火をつけ、家を掃き、見つけるまで念を入れて捜さないだろうか。そして、見つけたら、友達や近所の女たちを呼び集めて、『無くした銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください』と言うであろう。言うておくと、このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」ルカ

イエスの視点

救いを求めてやってくる人々を受け入れるイエス。イエスがこの人たちを受け入れるのは、救いを必要としている人の「道」を見つめているからです。

一方、救いを求めてやってくる人々を、救われないままの状態に留めておこうとするファリサイ人や律法学者たち。この人たちは、罪びとは滅びるべきであって、救われなくてはならないと考えている人たちのようです。

神が創造した”すべては良かった”世界を、善悪の知識の実を取って食べた人間は、価値の価値を直し直して、世を勝ち組と負け組の世界、すなわち人間が人間を苦しめて文句を言わせないシステムに変えた。そして、負け組である限り幸せはない、勝ち組でない限り、という、勝ち組志向の抑圧の中で、生き場を失っ

た者がそれでも生きるために自ら切り開いていった世界が、暴力団、国際テロ、あるいは引きこもり、不登校、ホームレス、依存症、拡大自殺、無差別殺人と、他人事のように思っていた出来事が今、私たちの家庭内の現実となりつつある問題となっていくのをイエスは見落とし、だからこそ、悔い改める必要のない99匹を荒れ野に残して、見失った一匹を見つけない出かけるのです。そして見つけたら肩に担いでその人にイエスは語りかけるでしょう。「あなたはあなたのままに私にとって宝物ですよ」と。

私たち人類は、一人ひとりと、神にとつて世に送り出したわが子です。親は、人生の旅を終えてわが子が実家に帰って来てくれる日を固唾をのんで待っているのです。どの子が一番になって戻って

くるのか、神はそんなこと見ていません。一人も欠けないで全員が戻ってくるのをひたすら待ち続けておられる親なのです。人生、旅の目的は、良い学校に入学し、良い成績を得て一流会社に就職し、財産と良縁を獲得し、豪邸にくつろいで、ああ人生成功だったと胸を張ることでしょうか？ そうではないでしょう。

すべての境遇を感謝しつつ、置かれた場所で、出会う全ての人を大切に、花を咲かせている人。このような、心の貧しい人の生き方こそが、いわゆる、後の人が先になる”神に栄光を返す最高の人生”と言えるのです。

2022年9月11日

主任司祭 昌川信雄

